

郁達夫ノート：『春風沈酔の夜』の文学空間

齋藤 匡史

郁達夫と時代空間

(一)

ここでとりあげる『春風沈酔の夜』は、1924年(民国13年)2月28日を以って停刊となった『創造季刊』第二卷二期(通巻6号)最終号に掲載された短編小説である。

文学団体としての創造社が1921年6月、東京の郁達夫の寓居で結成され、同年9月、暫時上海に戻った郁(26歳)は泰東書局編輯所(現在の人民広場西側、黄坡北路中段、旧静安寺路[現南京西路]に近い)に住み込み、創造社の機関誌ともなるべき『創造季刊』の出版準備の責を負った。18歳にして兄に従い渡日し、第一高等学校予科、第八高等学校、東京帝国大学経済学部に通学し、次第に文学に傾注していった青年の作家生活の開始であった。9月29日、上海『時事新報』に「純文学季刊『創造』出版の予告」と題した宣伝文が掲載され、その中で、

文化運動の発生以来、我国の新文芸は一、二人の文化偶像に壟断され、芸術振興の気運は失われ、將に尽きんとしている。ここに創造社の同仁は憤然と立ち上がり、社会の因襲を打破し、芸術の独立を主張し、天下の無名の作家達と共に、中国の未来の国民文学を造り上げんと願うものである。¹⁾(筆者訳)

と宣言している。

1) 王自立、陳子善編「中国現代文学史資料匯編(乙種)郁達夫研究資料(上・下)」天津人民出版社1982年12月、683頁

この時郁達夫は、9年に及ぶ在日留学生生活をひとまず終え(1922年3月、東京帝国大学経済学部卒業)、五四以後の退潮期にあった文学運動に身を投じたわけであるが、おりしも創造社結成の一ヶ月前、南方の広東では孫中山を首班とする広東政府が樹立されていた。孫中山の革命は、北洋軍閥との妥協と拮抗、続く広東軍政府の樹立と失敗と10年余の時間を費やしていた時であった。南北政権の対峙の中、社会情勢は新たな変革の予兆を窺わせながらも依然として中国社会は、新旧列強の圧迫、頑迷な封建遺制の呪縛のうちにあった。

近代体制下、大学と新聞雑誌出版は文化発展のふたつの最も重要な面である。とりわけ中国では、ロシアや日本と同じように、新文化の社会的基礎は新しい型の学生を主体としており、イギリスやフランスのような市民を主体とするものではない。従って大学の持つ作用はなおさら重要である。²⁾ (筆者訳)

将に五四新文化運動は、北京の大学教授、学生を中心にした新しい価値創造の精神世界を揺さぶる運動であり、政治運動としての五四運動の精神的支柱となった。しかし新文化運動の中で発刊された『新潮』、『語絲』等の刊行物は、すべて同人誌的性格が濃厚で、社会的反響は大きかったにもかかわらず、経済的な運営基盤や販路は極めて脆弱であった。したがって軍閥政府の弾圧により、この運動を中心的に支えていた大学の教授などが大学を離れると、一挙にその力を失って廃刊となった。

一方、新聞出版産業、近代的出版業を有する上海は、出版社が商業ベースで『新青年』、『小説月報』、『創造季刊』などの有力文学・総合誌を支え、全国の文学運動の中心地としての役割を果たす様になった。

上海が近代的出版業を形成し、新文学の全国中心地となる過程について

2) 王文英著「上海現代文学史」上海人民出版社 1999年6月、15頁

簡述すれば、それはまず「言論の自由、出版の自由」によるところが大である。租界は設置当初から、英仏米租界当局の支配下にあり、清朝政府、軍閥政府の施政権が及ばない地区である。当初住民は西洋人だけであったが(50万の上海市民は県城とその周辺に居住)、民国成立頃には江南、江北などから人口が流入し、その数100万人に達したといわれる。流入人口の多くは租界とその周辺に居住し、所謂「華洋雑居」状態が租界に生じた。「華洋雑居」開始後、家屋税(家賃に対する税)が中国人にも課せられ、土地税と共に、「20世紀初頭には、この二項目の税収で全体の六、七〇パーセントを占め」³⁾、流入人口が租界内に定着するようになると、「中国人居住者の納税総額は共同租界では外国人の1.5倍以上、フランス租界では6倍以上に達していた」⁴⁾のである。元来租界当局は納税者の自治組織から出発したのであり、中国人納税者の増大は、租界行政への華人参加要求運動となって表出し、華字紙の言論がこの運動と主張を大きく支えた。この時期の中国の他の地域では決して起こり得ない、「近代市民社会」の「学習」が租界で行われていたといってもよい。更に各新聞が「文芸副刊」欄を設け、小説、散文などをこぞって掲載し、読者の獲得に努めたことも、結果的に職業作家の活動の場を広げているのである。

上海出版業の発展について、王文英1999(註2)は、経済発展による流入人口から「職員階層」が発生し、工商業主、学生と共に「文化の消費者層」が形成され、大きな読者市場の誕生により、出版業が完全に資本主義的経営方式をとり、上海のみならず全国にその販路網を拡大した、と指摘している。また、労働者は1ポンド0.3元の豚肉の2～4倍もする雑誌を購入する消費水準にないが、彼等も必要とする情報、知識、娯楽は新聞、書籍から吸収した、とする。いわば労働者は直接の「文化の消費者」ではないが、その享受者として位置づけられる訳である。

上海の出版業は、新興都市市民向けの通俗的娯楽性刊行物から起こった

3) 高橋孝助、古厩忠夫編「上海史」東方書店 1995年5月、83頁

4) 同 87頁

が、五四新文化運動の影響下、新文学を「売れ筋」として取り入れ、『小説月報』刷新に見られるように、新しい型の知識人を編集者として迎え、近代的な「作家、編集者、出版社、読者」という文化市場の確立をみるに至る。創造社を支援した泰東図書局は、1919年に編集部を発足させ、新文学の単行本、雑誌を次々と世に送った。

しかしながら、芸術としての文学、社会正義としての文学の力は大きくとも、上海における読者層は、極めて限られたものであった。

現代主義文学思潮が上海に根を下ろすのはなかなか難しく、水面の月の影がゆれる如く行ったり来たりであった。作品の市場が少ないのは、上海の読者の観念が受け入れないことに由来していた。実際、当時の上海市場でのロングセラーは鴛鴦胡蝶派の作品であった。『創造季刊』は二、三ヶ月で1,500部しか売れないが、それでもましな方だ。この時『紅』雑誌（訳注—探偵小説中心の娯楽雑誌）などの売上げ部数は数万部にもなっていた。文学の商品化は文学の繁栄を促し、文学の新旧交代を助けただけで、文学の深化発展に利することはなかった。⁵⁾（筆者訳）

郭沫若のこの言葉は、中国新文学史上に名を残す作品が、当初から大いに評価され、広く社会の支持を得、強い影響を多くの読者に与えたものではないことをいまさらながら示している。名人の名作、名著という後世の評価が虚像を結び、喧伝され時空を越え、一人歩きしてしまう。これら作品の真の力量は、これを精神的糧として吸収し、静かな自己変革に導かれた若い読者—知識人達の後の社会的実践、文学芸術活動に具現されることを見落してはならないのである。

5) 註2「上海現代文学史」25頁

(二)

泰東書局は、『創造季刊』発刊前に、創造社メンバーの作品を「創造社叢書」として出版しており、郭沫若の新詩集『女神』、郁達夫の第一作品集『沈淪』（『沈淪』、『南遷』、『銀灰色的死』、1921年10月刊）も同叢書として出版され、後期創造社がプロレタリア文学に軸を移すまで創造社の文学活動をささえた。

初期の創造社は、唐弢の言葉を借りるなら、当初、同人の思想的傾向は一致しておらず、芸術的天才を崇め、創作はインスピレーションを重視する。文学に「完全」と「美」を求め、「内なる欲求」を忠実に表現する。文学の時代に対する使命に目覚め、旧社会を容赦無く攻撃し、赤裸々な人間の本性を極めるべきだという、ロマン主義的なもので、芸術のための芸術という言葉に代表される後の芸術至上主義の文芸観とは異なるものであった。⁶⁾こうした分析は、『女神』や『沈淪』によるものが大きいといえよう。特に『沈淪』は、作品の自己暴露性、性衝動によって、若い世代の読者を引き付けたが、社会的には伝統的観念や性倫理の規範から大きく外れるものとして批判された。

郁達夫の「小説の核心やストーリーは、青年が性への苦悶、性の追求、性の変態心理により、遂には性の失敗に至るもの」⁷⁾であり、「個」に対する封建的呪縛からの脱出と「個性、個人」の解放を強く主張したものである。ただそこには言い尽くされ、表現尽くされた個性の解放ではない、真の個の追求、個人即ち郁達夫自身が表現される蓋然性が存在し、人間は社会的関係に於いて存在する以前に、感情を持った一個として自然にあるということを含め、二重の意味で鮮烈な印象を与えた。

それは魯迅や老舎のような、中国人の心の病巣としてある精神的劣敗性を暴き、封建儒教主義への反抗を表現したり、国民性の弱点を痛烈に批判するという手法ではない、個人の心理的苦悩を昇華できない苛立ちと悲し

6) 唐弢主編「中国現代文學史(上・下)」北京 外文出版社 1986年 215~227頁参照
7) 張法《解读郁達夫小説》原載《江汉论坛》(武汉) 1999年9月第66頁

みを表現するという、社会正義とは別の次元からの、人間の魂と人間社会に向けられた咆吼にも似た赤裸々な個の追求の表出であると見なければならぬ。

「祖国よ祖国！俺の死はおまえがそうさせたのだ！」

「中国よ早く豊かになってくれ、強くなってくれ！」

「いまだ多くの青年達が、そこで苦しんでいる！」⁸⁾ (筆者訳)

しかしながら、敢えて言うならば、『沈淪』の結びの入水自殺を前にした主人公青年のこの叫びは、「個の解放」から一転して、社会性を持った変革への渴望として映り、ストーリーに齟齬を招来させたのではないかという疑義さえ生じる。これは小説全体の説明調からも読み取れることだが、文学的技巧の拙さに由来すると理解すべきであろうか。

「性」には時代的特徴がある。この当時、張法1999 (註7) の言う「自然之性 (欲)」と「理想之性 (愛)」⁹⁾ は綯交ぜになり、封建的恋愛観や性倫理においては、男女間の性愛は家と家との婚戚上に於いてのみ認知されるもので、われわれが今日いう「愛」ないしは「自由な恋愛関係」は当然成立せず、従って郁達夫小説の「性」は、人を愛し愛されるというの熱望としてではなく、「性欲への奔放さ」、ふしだらなものという社会的解釈が下されるのである。

西洋の進んだ学問思想を吸収して帰国した留学生達を待ち受ける中国は、進んだ物質文明には門戸を開くが、精神文明についてはこれを受容できる社会ではない。郁達夫も魯迅もはじめの結婚は、家長の定めた女性を妻として迎え入れているし、職業に関しても新式学校の教師ぐらいで、選択の余地がなかった。

ゆえに旧制度旧思想を打破し、人々を覚醒させたいと青年達が願うのは

8) 摘自郁達夫《沈淪》中国现代文学史参考资料 短篇小说选 第一册

9) 註7

ごく自然のながれであった。そこに新文学という媒体が影響力を徐々に持ちはじめ、同人の範疇から脱皮してゆくのではあるが、主観的な文学的情熱、感情は、芸術としての文学を創造することはできても、それを伝播させる力量は作り手にはない。作品を世に送り出す商業主義と文化市場に裏打ちされたシステム、つまり近代的出版業が整い、これを受け入れる大量の消費者—読者層が形成されねば、趣味的範疇の文学から脱することはできない。新文学の北京から上海への南遷は、まさに文学運動の自律的運動律を越えた、文学近代化のうねりであり、その活動の中心は当然、「近代文明」の洗礼をうけた上海という街でしか成立し得ない時代へ進んだと解すべきであろう。

『春風沈酔の夜』の物語空間

(一)

堀田善衛は『上海にて』（1959年 筑摩書房）の中で、革命前の上海という街の概観を仏人の作家—クロード・ロウの日記から引用している。

河を一つもって来るんだ、その河のほとりへマルセイユのドックを置く、そうしておいてサンフランシスコから五つか六つほどビルディングのブロックをちぎって来て、そいつを真中におく、そのまわりに数十キロにわたってマンチェスターの貧民街の道をつけ加える。それから、あちらこちらにリールとトリノの工場の煙突をさし込み、そのまわりぜんぶに映画の「ミラノの奇蹟」にあったような、例の癩を病んだような長屋を詰め込む、そうしてここへ六百万の中国人をおき、そこへ一握りのアメリカ人の実業家と英国人の「大班」と、彼等のための白系ロシア人の護衛、ボルドー酒の商人、インド人の巡查、ウィーン女の、あるいはハンガリー人の淫売をまぜると言えば昨日の上海というものをつかむことが出来よう。（“Clefs pour la Chine” Claude Roy, 1953）¹⁰⁾

一九二〇、三〇年代の上海の街を手際良く描写したこの文の街の華やかさとは縁も無い「癩を病んだような長屋」が『春風沈酔の夜』の舞台設定であり、六百万の中国人のうち男1人女1人が主な登場人物である。

鄧脱路の長屋は、地面から屋根までわずか一丈数尺しかない。私のいる二階の部屋はことのほかせまく、背のびをすると、両手がすすけた天井につきぬけそうだった。…中略…まっくらなこの二階はもともと猫のひたいぐらいしかないのを、家主が二間しきったもので、奥の間には、Nタバコ会社の女工が住んでいるので、私の借りたのは、梯子段の上がり口の小部屋だが、奥の間の人が私の部屋を通るようになっているため、私の毎月の部屋代は奥の間よりも何十銭か安かった。¹¹⁾(以下特記無きものは註11より引用す)

主人公の青年は失業して上海でぶらぶらしている半年間、静安寺路南(現、南京西路)の「鳥籠のような、陽のあたらない、自由の監房」から「競馬場近くのしりあいの家の倉庫」へと移り、最後にこの「外白渡橋の北岸の鄧脱路の中ほど、日新里の向いの貧民窟」に疇を定めた。これは郁達夫自身が日本から上海に戻り、泰東書局編輯所(現一黄坡北路中段、旧静安寺路に近い)に住み込み、『創造季刊』の発行準備をしたことが下敷きとなっている。鄧脱路(Dent Road—現、丹徒路)は、共同租界北区、東百老匯路(East Broadway Road—現、東大名路)と周家嘴路の間にある全長五百メートル足らずの通りで、東百老匯路口に陳二妹が働く「Nタバコ会社」(原文—某某煙草公司、実際には南洋兄弟煙草公司)があった。ここから東には工場が建ち並び、労働者が多く居住していた地区である。

主人公の青年の家賃は小説中より3元程度であることがわかる。陳二妹

10) 堀田善衛「上海にて」筑摩書房 1959年11月、61頁

11) 「現代中国文学6 郁達夫・曹禺」河出書房新社 1971年12月、岡崎俊夫訳「春風沈酔の夜」

は煙草工場で毎日10時間休みなく働いて、月9元にしかならず、そのうち4元が食費、3元程度が家賃でほとんど手元には残らない。当時の統計によれば¹²⁾、1928年下半期の30業種工場労働者の平均月収(童工、女工を含む)は、5.32元から40.20元で、旧式商店の普通店員が10~20元であったから、陳二妹は技能を持たない単純労働者として最低の収入であったといえる。主人公青年は、数編の4千字に満たないドイツの短編小説を翻訳し、稿料が5元ということになっている。ちなみに当時、上海の大学教授は、300元程度の月給で、70、80元の借家住まいが普通であったという。魯迅は1932年4月、新築3階建の大陸新邨へ最後の居を持ったが、60元の家賃で茅盾はこれを大変高かったという言葉を書き残している。¹³⁾

二人の孤独な若い男女が大都会の片隅で、それぞれ生存のための最低の糧と空間を得ようとする上での接触が、孤独で無機質であったはずの大都市での空間を暖かいものに変え、その時間に生きる喜びに変えている。基本的には人間愛の物語である。

ところで張法1999は、郁達夫小説の特徴を「物語」小説であるとし、その主題は「文人、病体、自然、色痴」であるとする。

「文人」について、「作者の作風が大きく変化したとされる『春風沈酔の夜』においても、主人公はやはり本の虫であり、何も無いところにただ本だけがある」(筆者訳)。

「病体」については、「主人公はほとんど病の身で登場するか、病の身で登場しなくとも、物語の進展において必ず一度は病気になる。例えば『春風沈酔の夜』がそうで、主人公は不眠症になる」(筆者訳)。と論述する。

不眠症のほか「春から夏にかけての神経衰弱」もある。「自然」について張法は、登場人物が美しい自然の中に身を置けば、たちまち抱擁がはじまり契りを結ぶと断じている。『春風沈酔の夜』についてはこの点論証がないが、都市の生活雑踏の中の少ない季節感、夜空、星がその装置の役割をに

12) 忻平「从上海发现历史」上海人民出版社 第4章第二，三节参照

13) 拙稿「老舍—職業作家への道」，九州大学中国文学会「中国文学論集」第22号，93頁

なっているともみえる。「色痴」は、「エロチシズムの追求ではない、性への唯美的欲求」が、郁達夫小説の特徴であるとする。¹⁴⁾

張法論文は総じて言えば、郁の文学は、五四時代の新精神を代表するものであるが、社会性を失いその芸術としての力量を減じているという月並みな結論を導き出す。郁達夫の小説は郁達夫自身が言うように「自叙」小説であり、個の解放と個を追求する精神が急速に個の総体としての社会に収斂されていく新文学にあって、頑なにそれを貫いたところに特徴なり価値なりがあるのではないだろうか。

郁達夫文学の性についての議論は多い。この物語は、性というより自然な愛について、次に三つの場面での描写が見える。

まず第一は、工場が引けて帰宅した陳二妹が梯子を上って来る初対面の場である。

くらやみのほうを数秒間じっと見つめていると、まるい蒼白い顔、そしてほっそりとした女のからだの半分が私の目にうつってきた。(挨拶をしても彼女は一筆者加註) なんとも答えず、黒い大きな目でまじまじと私のほうを見たきり…(そのまま自分の部屋に入って行った一筆者加註) どういうわけか私には彼女がいとまわいらしい女に思われた。彼女の高い鼻、蒼白い円長の顔、やせた、そう高くない体つき、すべてが彼女のかわいらしい特徴を表しているようであった。

一週間後、帰宅した彼女が警戒心を解いたのか初めて声をかけてくる。

「毎日なんの本を読んでいらっしゃいますの？」(彼女の言葉はやわらかな蘇州なまりで、その声をきいた直後の感覚はとても書きあらわせないの
で、いまはただそれをふつうの言葉にした。)

14) 註7, 67頁

主人公の観察には、一個の人間に対するというより、男としての視線が直截出ている。男女間の交際について、社会全体では封建儒教主義の影響が色濃く存在したなか、この物語では、男女が自由に交流を始める。筆者はこの点、陳二妹の人物形象を、貧しく、か弱い女工ではあっても「家」に束縛されない、働く一個の女性として独立した人格とする。さらに父を亡くし、親戚も無い天涯孤独で、父親亡き後もその部屋に住み続けている隣人という安全弁を用意し、男女の交流についての所謂「不道德」という謗りをかかず。しかしながらこの描写は、前述のように一個の対等の人格に対するものとは見えない。女性への関心の持ち方が露骨である。

次の場面は、10日ばかり後、陳二妹が青年に葡萄パンとバナナを買って来て、いっしょに自分の部屋で食べようと申し出る。そこでの会話で、青年を自分と同じく流浪の身でさらに失業中、同情すべき対象と思い込む、という情景。独身のうら若き女性の部屋に対しての興味が、青年の眼を通して、部屋の調度や生活用品の詳らかな描写となっている。そもそも隣人とは言え、部屋に招き入れ、食物をいっしょに食すこと自体が、暗示となっている。

さらに、翻訳の稿料で身なりを整え、土産を買って帰るが、いつまでたっても二妹は戻らない。10時過ぎに、夜間作業を終えて戻って来て、言葉を交わすという場面。彼女は涙を流しながら、青年に悪事を止め、節約してまっとうに生きるよう諭す。不眠症のため青年が夜出歩くことを、悪い仲間と悪事を働いていると勘違いしていたのである。弁解を聞いて信用した彼女は顔をあからめた。

彼女のこんな単純な態度を見て、心にふと一種不可思議な感情がわきおこった。私は両腕をのばして彼女をだきすくめたくなった。しかし、私の理性が私に命令した。「こら、悪いことをしてはいけない。貴様は自分がいまどんな境遇にあるかわからないのか。貴様はこの純潔な処女を毒殺するつもりか。悪魔！悪魔！貴様は愛人を持つ資格なんかないのだ

ぞ！」

同情、憐憫から自然に起こるほのかな愛を郁達夫の筆は、理性として加工をし綴るのではなく、本能的な欲望を記すことにより、人間の感情に素直であろうとする。テーマの違いはあっても、『沈淪』の手淫、出歯亀、覗き見の描写に比して明らかに衝撃度は薄れており、もはや「性（欲）」は、突出した主題ではなくなっていることが伺える。

主人公青年は、不眠症と神経衰弱のため、毎日夜から明け方にかけて街を徘徊するのだが、小説にはその描写はない。稿料を郵便局に取りに行き、春衣を購入するため、閘路（「石路」とも呼ばれた。服店、古着店、生地屋が並ぶ。現一福建中路）から五馬路（服屋、生地屋が多い。現一広東路）まで歩き、風呂屋に行き、陳二妹への土産を買って長屋へ戻るのが、唯一の昼間の外出情景である。他の場面はほとんど鄧脱路の主人公の部屋である。

この閉じ込められた空間は、主人公が暫時身を寄せる場であり、失業という状況から脱し生活基盤を持つための通過点である。この実際空間を共有する女工との愛の予感、青年にとってその空間を永遠にしてしまう恐怖を伴う。従って青年は、実際空間から自らの心象空間をずらさねばならぬことを己の理性に訴える。窓もないこの仕切られた部屋の向こうには、陽光が射す小さな南窓と石油ランプの仄かな灯かり、そして一時の精神的な安逸を分け与えてくれる陳二妹がいる。しかし主人公青年は、外へ外へと足を運び、夜毎街を徘徊する。

象徴的に、①日中でも陽の入らない部屋の小さいローソクの灯—希望、②寝静まった街と空の星星—大きな空間へ—現状からの脱出、③小説の尾声、春の哀愁を含んだ空と雲—未来の変化への渴望、を配す。

私ひとりきりの世界であるくらい小部屋の、くさりきった空気は、蒸籠のなかの蒸気のようにむしむしして頭がくらくらした。毎年春から夏

にかけておこる重い神経衰弱が、こんな気候にあって、私を半狂人にし
そうだった。

ひとり大通りを、深い藍色の空にかがやく星くずを仰ぎながらゆっく
りと、とりとめもなくはてしもない空想にひたりながら歩くのである…

空一面にひろがった灰色の薄雲が、くさった死体のようにどんよりと
頭上におおいかぶさっていた。雲の裂け目から一つ二つ星が見えたが、
星のちかくの、どす黒い空の色は、無限の哀愁をふくんでいるように見
えた。

狭い空間（現状）から、「寝静まった街」（世の中）へと出る。「雲、星、
空」は、まもなく自らが生存とより人間らしさを求めて、葛藤しながら
生きていくであろう近い将来を暗喩する。更に未来への期待と羨望が、
雲間に見える漆黒の空と星に表現される。そして広がり求めて、現況
からの脱離を願う主人公青年の心情を象徴的に描写する。それは他でも
なく郁達夫自身の路程を重ねた想いのこもった述叙である。

(二)

郁達夫は『春風沈酔の夜』から8年後、『達夫自選集』を出版するにあたり、その序文に次のように記している。

『春風沈酔の夜』（原題—『春風沉醉的晚上』）、『ささやかな供えもの』
（同一『薄奠』）、『微霧の朝』（同一『微霧的早晨』）は、多少なりとも社会
主義的色彩を帯びているが、創作年代が旧く、意識も明らかならず、力
量も微薄で、スローガンも提起していない。故に選集から削除し、悪影
響が後の読者に及ばぬようにと考えたが、この数編、既に外国人の翻訳
ありと聞く。削除すれば露日英独各国同志の盛衰にも係るゆえ、これを
残し長らく遺羞とす。

1933年3月上海天馬書店初版『達夫自選集』序（筆者訳）

『春風沈酔の夜』発表時の社会情勢は、国共合作の革命気運の高揚期にあり、上海の労働運動が勢いを持った時期であった。創造社メンバーは、次々と広州一革命軍の大本営に参加し、郁達夫自身も1926年3月、広東へ赴いた。ほどなく北伐は開始されるが、その9ヶ月後、上海は蒋介石の反共クーデター（1927年7月）で血の海と化す。この当時、郁は（同年6月）杭州で王映霞と婚約（先妻、孫荃と別居、後に離婚）、28年1月、王映霞と結婚し、上海赫徳路（Hart Road、現一常德路）嘉禾里（現在の静安公園に隣接）に新居を構える（王映霞との間に、郁飛、郁雲、郁荀の三子をもうける）。文学運動では、新たにプロレタリア文学を標榜した創造社を離脱、魯迅とともに歩む決意をしている。

この『序』を書き上げ（32年12月）、1933年4月、国民党の弾圧と検閲が強化された上海を離れ、一家で杭州へ転居している。序文で言う「社会主義」とは、マルクスレーニン主義をさすのではないことは、無産階級革命文学を掲げた創造社との決別（1928年1月）を見れば明確であり、「社会への強い関心」、「文学の社会性」と解すべきであろう。それは鄭伯奇が、論評するように、「女工の生活や境遇を作家は、深い同情の筆致で描くが、その描写は決して多くの客観性を含むものではない。もしより客観的、写実的に描き、彼女たちへの同情を社会から勝ち得、一種の熱い正義感を呼覚ますことが可能であったかもしれない。しかし作家はその手法を取らず、強烈な反響も呼ばなかった。作家の意図するものは、自己の感情の表出であり、自己の生活の叙述の一断片」（大意）¹⁵⁾なのである。陳二妹という女工は、この物語の主人公ではなく、「中国現代文学史上最も早く労働者の人物形象を表現した作品の一つ」¹⁶⁾という評価に一体どれほどの意味があらう

15) 鄭伯奇「『寒灰集』批評」1927年5月『洪水』第3巻第33号、註1上巻322頁

16) 王自立、陳子善編「中国現代文学史資料匯編（乙種）郁達夫研究資料（上・下）」、686頁

か。

創造社との対立は、郭沫若が広州の革命に加わった後、残った会員が太陽社と共に「プロ文学」の旗印を鮮明にしたためである。これについて郁達夫は、

私の態度は今も不変である。党派に属した行動は承服しかねる。私が創造社と合わないという感情を持ったからではなく、興味が異なったため袂を分かったのである。私を個人主義というが、勝手に私を排斥しているだけだ。しかし私は意に介さない、当時の創造社は、若い左傾分子があまりにも多く、彼らの態度は良くなかった。それに早くから魯迅と良い雑誌を出したいと思っていて、ようやく魯迅と握手となった訳である。¹⁷⁾ (筆者訳)

この時、郁達夫は魯迅や対立関係にあった文学研究会と接近、特に魯迅とは、雑誌『奔流』、『大衆文芸』を編集発行した。郁達夫はいわゆる政治的人間ではないし、文学に政治を持ち込むことに賛成しなかった。時を同じくして老舎も上海文壇の政治的傾向性を嫌い、職業作家への道を断念し、再び大学教員に戻っている。労働者階級、女工以前に、一個の人間としての陳二妹という人物形象を描き、人間としての感情—関心と同情を示した、個人の主観的文学なのである。社会性や政治的自覚の欠如を文学評価に持ち込むことに意味が無い訳ではない。それは中国文学に脈々と流れる文学精神であり、「プロ文学」や「革命的文芸観」或いは「リアリズムの手法」は、この伝統精神と極めて相性が良かったのである。だが文学の芸術性がこれによって排除または制限される根拠とはならないことも、自明の理である。社会性が強調されたのは時代の反映であった。

17) 原載—黄得時「郁達夫先生評伝」1947年9-10月「台湾文化」第2巻第6-8号、註1、430頁より引用

郁達夫と上海の都市空間

郁達夫は『わが夢わが青春』(1934年12月執筆)で、1909年(宣統元年)、省都杭州の中学に入るため、故郷の浙江省富陽をはじめて離れるが、そのころ富陽の人々は杭州へ行くのは新疆のイリに流刑されるのと同じで、遙か辺境に行くものと見做しており、祖宗を祭り、宴を開き、親類縁者総出で見送りをしなければならなかったと書いている。それから3年後、北京の政府の司法部勤務の長兄の渡日に従い、日本に留学することになった郁達夫は、初めて上海の地を踏むことになる。その当時の印象を次のように記す。

上海の街路樹のスズカケの葉はもうだいふ黄ばんで、夕暮れの街では、あの騒々しい住民もさすがにしみじみ秋の訪れを感じているように見えた。私はひとり一品香(西洋料理店の名)の西向きの露台の欄杆を前にぼんやりつつ立って、生まれて初めて見る大都会の夜に大きな脅威をおぼえた。

遠く近く灯火きらめく高層建築、眼下の街路を織るがごとく往来する車馬、上海は不夜城とか銷金の窟とかいわれているが、では国家は? 社会は? こんなその日暮らしをすることが果たして人生の目的であろうか。金銭の争奪、犯罪の横行、精神の浪費、肉欲の氾濫、…(中略)…こんなふうにごしてよいものでしょうか。この世に生まれて、わずか十七年あまりにしかならぬ当時の私の幼い頭には、帝国主義の陰謀、物質文明の頹廢、世界現状の危機、ないしは経世済民の大策等々についての明確な観念などはもちろんなかったけれど、しかし社会の本然の姿、人間の正しい道は、なんとしてもここにはないのだと思った。¹⁸⁾

18) 註11, 「現代中国文学6 郁達夫・曹禺」 岡崎俊夫訳「わが夢わが青春」31頁

論考から些か外れるが、上記「一品香」の訳注は不正確である。「一品香」は「一品香旅社」で1883年創業の宴会場、ダンスホールを備えた名の通った大型ホテルで、虞洽卿路（現一西藏中路）漢口路口、競馬場（現一人民広場）を前にする、繁華な地段にあった。

「東方のパリ」と称された中国第一の大都会は、17歳の田舎から出てきた青年には余りにも刺激が強烈すぎた。しかしながらその8年後、「社会の本然の姿、人間の正しい道は、なんとしてもここにはない」と断定した上海が彼の文学活動、生活の基盤となったのである。

欧米人は「冒険家の楽園」と言い、日本人は「魔都」と形容した上海は、移入された擬似「近代」であったとしても、上海人はそれを自らを発展させ富ませる装置として巧みに利用した。この地においてそれが可能だったのは、「国中国」である租界、それを運営する西洋式制度が存在したからにはほかならない。「帝国主義の陰謀」に始まった西洋人の営みが、上海に次々と移住する人々を教育し、上海を中国のどの地よりも物資文明の進んだ街として築き上げた。そしてここで生まれる文化は、この地の人々（全てではないが）の日常生活に潤いと享樂をもたらした。革命の都一広州から上海に戻った郁達夫の生活を『村居日記』¹⁹⁾(1927. 1. 1 ~ 1. 31)から拾うと、

26. 12. 28友人宅で朝まで麻雀、12. 30ロシア領事館でバレエ鑑賞、27. 1. 1寧波飯館で夕食、大馬路で色々買物、龍井の芽茶を飲み、桂花年糕を食す、1. 2午後、散髪、風呂屋、夜、老東明で酒を飲み夕食、1. 3友人と飲酒、1. 4友人宅で食事、霞飛路の喫茶店でコーヒー2杯、1. 5五芳齋で昼食、1. 6法大馬路の酒場で小酌、1. 7ビールを飲む、1. 8陶樂春で食事、風呂屋、1. 9友人とロシア人宅でロシア料理、1. 10酒場でしたたか飲む、上海法科大学のドイツ語教師の口、週6時間月48元を承諾、夜、回教徒のイスラム料理、エンパイヤ劇場で映画、1. 11創

19) 立間祥介訳「日記九種（抄）」136—155頁

造社出版部の金数千元持ち逃げされ、自棄酒、映画を見てさらに酒場へ、そして風呂屋に……（抄録一以下略）

もちろんこの間に仕事や時局についての記述はあるが、連日、友人との歓談、会食、酒場、映画、観劇が繰り返される。興味深いのは、北京にいる妻、孫荃から皮のコートが送られて大変喜び、妻を慕う記述と王映霞との恋に胸をときめかす記述が平行してある。

文学者の生活態度について論評するつもりはないが、日記からは、上海という大都市ならではの生活の愉悅が垣間見られる。

郁達夫の上海の居住地をまとめると、

- ・1921. 9 泰東書局編輯所（現在の人民広場西側、黄坡北路中段、旧静安寺路〔現南京西路〕に近い）に暫住
 - ・1922. 7～9 哈同路民厚南里の泰東書局（新規移転先）に居住
 - ・1926. 12～ 市郊外の上海芸術大学校内、市内ホテルなど
 - ・1928～1933. 4. 25 赫徳路嘉禾里に王映霞と新居を持つ、杭州転居まで。
- 創造社（泰東から独立後）
- ・1926. 3～1927 出版部営業課・直売店、閘北宝山路三德里A11号
 - ・1928. 1～1929. 2 出版部 北四川路麦拿里

となり、静安寺の住まいと閘北、虹口の往復が日常であった。移動は主に路面電車、トロリーバスを使っていた事が日記からわかる。創造社から脱退した郁達夫は、広州から戻った魯迅（1927. 10. 3 午後上海着、愛多亜路長耕里〔現一延安東路158弄〕の共和旅館に投宿、晩、陶樂春で夕食、10. 8 景雲里へ転居）の歓迎の宴席に王映霞と出席した。すでに魯迅とは1923年秋から25年初まで北京大学で同僚であった。こののち魯迅とは共同で月刊誌『奔流』、『大衆文芸』を出す、頻繁な行き来が始まった。そのころの二人の姿を、金子光晴がとらえている。

共産党出版物の創造社に、蔣介石政府の役人が踏みこんで、噂をきい

て駆けつけてみると、椅子はこわれ、戸棚のものはぶちまけられて、派手派手しい乱暴狼藉のあとだった。責任者の鄭伯奇が呆然としていた。張資平や、茅盾のような花形作家の本はみんな、そこの社から出ていた。

バルザックの表現にならえば、二つの胡桃割りのように、魯迅と、郁達夫がつれ立ってあるいている姿を、北四川路の近辺で、どこへいっても私は、よく見かけた。やや背の低い中年の魯迅のそばに、ひょろりとした郁達夫がよりそって、なにかひどくこみいった内緒話でもしているように、話しかけると、魯迅は、しきりにうなずいている。蘇州河の河岸っぶちにしゃがんで、魯迅が石で土のうえに図を書いて説明していることもあったし、横浜橋のらんかんに郁さんが腰かけて、一時間ほども二人でじっと考えこんでいることもあった。「あれはあれでなかなか苦勞があるのや」と、内山先生は、わかったように、一口で片付けたが、秋田も、「つまらん相談をしているのだよ」と一蹴していた。つまらん相談というのは、アナルシストから、コムニストに転向しようとして、懊悩苦悶しているところだとつけ加えた。²⁰⁾

この時、創造社出版部は北四川路麦拿里にあり、里弄（本通りから住宅に入る道、又その住宅街一画を指す）を出て北四川路のすぐ左手に「内山書店」（1917～1929までこの地で営業）があり、さらに百米北に進み東に入ると、金子の寓居（1928～1929）があった。また、内山書店のすぐ先の角を曲がり、宝楽安路を越え、横浜路に入ると、すぐ魯迅の住居（1927.10～30.5）のある景雲里（実弟の周建人、茅盾、葉聖陶らも住んでいた）が見えた。金子は内山完造が魯迅に紹介したもので、『魯迅日記』1928年4月2日²¹⁾に、郁達夫の招待で、三馬路（現一漢口路）の「陶樂春」で金子、内山らと会食の記述がある。金子が散歩かなにかの途中で目撃したふたりの姿が、

20) 金子光晴「上海灘」、村松友視「上海読本」福武文庫 1988年11月、65、66頁より引用

21) 「魯迅全集 第14巻 日記」人民文学出版社 1981年、708頁

日本の詩人の文字により永遠に残った訳である。この時郁達夫の文学活動の方向は定まり、1930年2月、魯迅と共に「中国自由運動大同盟」発起設立し、翌月には左翼作家連盟へ参加した。

上海という街を嫌った若き郁達夫は、上海という街でしかその文学を伸びやかに営むことができなかつた。安慶、漢口の大学に職を得てもまもなくして上海に戻ったし、大革命の震源地—広州での活動も長く続かず、上海に戻るのである。自らの文学の方向性を見出した時、国民党の検閲、弾圧を嫌いこの街を離れ、1933年4月、杭州へ一家で転居を決意する。この転居を思いとどまらせようと、魯迅は説得するが聞き入れられなかつた。魯迅はその冬、杭州の郁達夫にあてて七律の『阻郁達夫移家杭州』を贈る。

「乱昏昏的上海租界（うす暗い上海の租界）」と『春風沈酔の夜』で主人公青年に言わせた上海は、社会的にはそうであったかもしれないが、文学者が見つめるべき対象が充満した刺激的な街であったのではなかつたか。

あとがき

郁達夫の『春風沈酔の夜』を筆者が初めて読んだのは、二十数年も以前のことである。それから何度となく読み返してきたが、なぜかこの小説が気になっていた。今回筆を起しながら、その理由が漠然とながら判った。それは郁達夫のやや遅い青春の時間と空間がこの小説に凝縮されており、それが上海という街であったからではないかと思う。

筆者は上海留学時（1979. 9～1981. 8）に浙江省富陽県にある郁達夫の生家を参観し、孫荃夫人との間に生まれた子息に会っている。またその後、誰から依頼されたのか記憶が定かでないが、福州路（旧—四馬路）近くに王映霞との間の子息、郁雲氏（郁飛氏かも知れない）の家を訪ねた。そして子息である日本に留学中の郁文君に、万が一彼が生活に困窮したとき売ってお金に換えるようにとの伝言付のかなり重い金の指輪と彼宛ての手紙を言付かった。そしてそれを指にはめ、日本に戻った。その時分は無事

に手渡したということだけで、なんの感慨もなかったが、この指輪は他でもなく郁達夫が付けていた形見であった。なにか因縁めいたものがあったのだろうか。

上海の時代文化と文壇について十分述べるには至らなかった。これについては稿を改めて論じたい。

参考文献

- ・木之内誠 編著「上海歴史ガイドマップ」大修館書店 1999年6月
- ・「旧上海史料彙編」(上・下) 北京図書館出版社 1989年10月
- ・「近代上海繁華録」商務印書館国際有限公司 1993年7月
- ・「上海百年掠影 (1840s-1940s)」上海人民美術出版社 1992年2月